



上菅田中学校だより

第2号 平成30年5月11日発行

発行責任者 校長 関 恭雄

上菅田中学校 学校教育目標

- ◆学びを深め、実践力を養う
- ◆互いを認め、自分を伸ばす
- ◆豊かな心と健康な体をつくる
- ◆地域の一員、国際社会の一員であることを自覚し、行動する

創立 50 周年へ向けて～実行委員会の立ち上げ

1970（昭和 45）年 4 月に開校した上菅田中学校は、来年度（平成 31 年度）創立 50 周年を迎えます。50 周年を迎えるにあたり「母校への誇り」「地域への感謝」「上菅田の未来への希望」を上中につなぐりのある多くの方々と共有することを目的に記念事業を実施します。そのための組織として「上菅田中学校創立 50 周年記念事業実行委員会」を立ち上げ、記念式典・祝賀会部会、記念誌部会、イベント部会、経理・事務部会の 4 部会で記念事業の企画・運営を進めます。（実行委員会のメンバーは次の通りです。敬称略）

実行委員長	山田茂幸（27～29 年度 PTA 会長）
実行副委員長	小松美穂（PTA OB）、白須直美（現 PTA）
顧問	松野正敬（上菅田連合自治会会長）、塩田清（西谷連合町会会長）
実行委員（PTA OB）	山野邊和子、西留美
実行委員（現 PTA）	渡邊勢子、久保田江美、小室桂子、齋藤由香里、木村利沙、春田千秋
実行委員（学校）	関恭雄、内田克弥、角田宣夫、高浪裕子、天池学、米良龍洋

右の写真は 1968（昭和 43）年 12 月に現在の
上菅田中学校の校庭で行われた「西谷中学校
笹山分校」の開校式の様子です。校舎も 6 教室
しか完成していないようです。この写真の 1 年 4
か月後に、上菅田中学校が正式に開校すること
になります。ちょうど、大阪万国博覧会の開催の年
と重なったため、開校年度の 3 年生は、修学旅行
で京都・奈良と大阪万博を見学しました。新幹線に乗って大阪万博を見に行くことは、当時
の子どもの夢のひとつでした。私も中学生になった年で、「太陽の塔」や「月の石」に憧れ
ましたが、その夢は叶いませんでした。開校後、しばらくは生徒数の増加が続きます。1976
（昭和 51）年度の 1279 名（30 学級）が生徒数のピークです。その翌年度 4 月に新井中学校
が分離独立しましたが、平成 30 年 3 月までの卒業生の総数は 9970 名に達しています。今の
3 年生で、卒業生数が 1 万人の大台を超えることになります。ちなみに、赤学年（現 3 年生）、
青学年（現 2 年生）、緑学年（現 1 年生）という今も使用している学年の呼び方は、昔の学
年ごとに統一していたジャージの色をあらわしていることは言うまでもありません。



左から赤ジャージ、青ジャージ、緑ジャージ。学校ホームページではカラーでご覧いただけます。

かみちゅう

上中防災ボランティア

「地域のため、自分自身のために防災について
学んでみませんか？」 地域コーディネーター

の呼びかけに応じて、1年生2名、2年生1名、3年生2名が防災ボランティアに応募してくれました。ボランティア募集のちらしには、次のようなPRが書かれています。

「東日本大震災から7年が経ちました。その当時被災された地区で様々なところで力を発揮したのは、実は大人たちでも高校生でもなく、地域の中学生でした。その経験から、「もしも」の時に地域の人たちは、中学生の力を期待しています。上中の皆さん、地域のために防災について学んでみませんか。皆さんの力を期待している地域の防災担当の皆さんが、「避難所の設置」「救護方法」など、「もしも」の時に必要なことを教えてください。そこで身につけた知識や技能は、大人になってからも十分に役立つものです。」

私も副校長と共に地域コーディネーターのお手伝いとしてボランティア活動に参加したいと思っています。上中防災ボランティアの活動開始は、宿泊行事や定期テストが終わる6月末から7月初旬を予定しています。活動の様子は、今後も学校だよりを通じてお知らせしていきたいと思います。

東日本大震災は、大人にとっては忘れることのできない記憶として残っていることは言うまでもありませんが、今の中学生にとってはどうなのでしょう。今の中学3年生は、当時はまだ小学1年生、中学2年生・1年生は、当時はまだ幼稚園・保育園児でした。ですから、これからの子どもたちには、大人や社会が震災の経験や教訓を継承^{けいしょう}していくことが必要です。

(以下は私自身の震災当日の記憶とその年の学校だよりで書いた文の一部です。)

(2011年3月11日を振り返って)

今から7年2か月前、東日本大震災が発生したその瞬間、私は横浜市内の中学校の職員室の副校長席にいました。尋常ではない揺れを感じて、すぐに緊急放送のマイクを握りました。ちょうど下校時間と重なったため、昇降口で恐怖の表情でしゃがみこんでいる生徒の姿が見えました。「揺れがおさまるまで校舎から飛び出さないで、頭を守りなさい！」と必死で呼びかけ続けました。揺れがおさまった後、校庭への避難を開始しましたが、すでに帰宅途中の生徒も多く全員の無事が確認できません。情報収集や地域の状況確認も容易ではありません。電話もつながりにくくなり、メール配信は送信しても保護者にすぐには届かず混乱が続きました。結局、この日は教員が引率して方面別に集団下校することにしましたが、帰宅できなかった保護者がいたことも考えれば、学校留め置きにするべきでした。(現在はこの時の教訓から震度5強以上の地震が発生した場合は学校留め置き、保護者引取りが横浜市の原則になっています。)その夜は、学校に泊まり込み、信じ難い津波の映像に戦慄しながらも、地震で壊れて水を吹き出す浄化槽の対応や卒業式を終えて遊びに行っていた東京ディズニーランドで地震に遭い、行方がわからなくなった3年生生徒の対応等に追われ、あっという間に夜が明けました。その後の停電やガソリンスタンドの閉鎖など日常生活の不便さは、次々と明らかになる東北地方の言語に絶する被害の状況や原発事故の報道の衝撃によってかき消され、人生で経験したことのない絶望感と無力感を感じる日々が続きました。

(震災後に赴任した小学校の4月の学校だより より)

子どもたちは、今、耐えています。被災地の子どもたちだけではありません。横浜の子どもたちも、言葉にはあらわせない恐れや不安をかかえながら、自分が何をすればよいのか考えています。やりたいことができなくても我慢しています。繰り返しテレビで流される悲惨な光景に心が傷ついています。このような時代だからこそ学校は子どもたちにとって「夢と希望を抱ける場所、笑顔と優しさ^{やさしさ}と勇気があふれる場所」でなくてはなりません。(後略)

(同上 6月の学校だより より)

正常性バイアスとは、災害や事件・事故などが発生した時に「こんなことは起きるはずがない」「自分が巻き込まれて命を落とすことはない」などと思い込み、異常事態を認めるスイッチが入らない心理状態のこと。正常性バイアスは、災害や事故発生時の避難や初期対応の遅れにつながる。最近の防災・危機管理の専門家は、正常性バイアスや集団同調性バイアス(みんなと同じ行動をとっていけば大丈夫という思い込み)などの心理学の視点から防災や危機管理を見直し、被害を軽減することの必要性を説いている。

東日本大震災は、私たちの「自分だけは大丈夫だろう」という正常性バイアスを完全に解除させ、私たちはちょっとした余震にも敏感に反応し身構えるようになった。……ところが、震災から80日余りが過ぎ、「次の大地震はすぐには来ないだろう」「大地震が来ても自分は助かるだろう」と私たちの心の中で徐々に正常性バイアスが再生されつつある気がしてならない。(後略)